

京都大学	博士（文学）	氏名	村瀬 有司
論文題目	トルクァート・タッソ『エルサレム解放』の直接話法の形態と効果		
（論文内容の要旨） 物語の登場人物が自身の言葉を語る直接話法は、その心情や思考を直接的に読者に伝達する。その台詞は話者の姿を前景に押し出ししながら、時には声のトーンや発話に伴う身振りまで読者に思い描かせる。語り手の言葉に還元されるために多様な響きが少なからず失われる間接話法に対して、直接話法は、登場人物の言葉を再現することによってその姿を鮮やかに描き出し、文脈に即したさまざまな効果を生み出すことができる。古代ギリシアの叙事詩から今日の小説まで、直接話法が様々な場面で重要な役割を果たしてきたことは言うまでもないだろう。 トルクァート・タッソ（1544-1595）は、第一回十字軍による聖地解放を歌った英雄詩『エルサレム解放』において直接話法を積極的に使用している。長短さまざまなボリュームのこれらの台詞は、登場人物の言葉に織り込まれた巧みな表現や修辞技法によってその効果を高めている。と同時にそれらの台詞は、詩連における配置そのものによっても、しばしば強い印象を与えている。8行詩節の台詞は、詩連の形式的特徴にしたがって、連内の特定の位置を占め一定の長さをとる傾向にある。その一方で、タッソの英雄詩にはこの規範的な配置から外れた直接話法が少なからず存在する。これらの台詞は、作品内で文脈に応じた特別な効果を生み出しているという点で重要である。本論文は『エルサレム解放』の直接話法の特徴的な形態を指摘し、その効果と役割を明らかにすることを目的とする。 直接話法の配置の効果を考察するうえで本論文が注目するのは、台詞の起点と終点である。直接話法とその前後の地の文（または別の直接話法）との位置関係、並びに両者の接続の様態は、台詞の出だしと締めくくりの効果を考えるうえで重要な手がかりを提供してくれる。先行するフレーズから直接話法がどのように始まるか、また直接話法から次のフレーズがどのように再開するかを検証することによって、台詞の配置の効果を叙述の展開のなかに位置づけて考察することができる。また叙述の様態が切り替わるポイントで、詩句の役割を分析することが可能になる。 台詞の出だしに関しては、直接話法を導く導入表現が本質的な役割を果たしている。「彼は言った」に相当するこの語句が直接話法に対してどのような位置をとるかによって、台詞の出だしの効果は大きく変わる。一方、直接話法の末尾については、詩行・詩連の終わりで閉じられる調和的な配置に対して、そこからずれたイレギュラーな終わり方が注目すべき効果を生みだしている。このように直接話法の出だしと末尾の形態に注目することで、今まで顧みられることのなかった観点から、個々の場面を理解することが可能になる。また『エルサレム解放』のいくつかのシーンを詩人の意図に沿って読み解く道が開かれる。			

『エルサレム解放』の直接話法の配置の特徴を明らかにするために、本論文はタッソの英雄詩に加えて、ボイアルド（1441-1494）の『恋するオルランド』とアリオスト（1474-1533）の『狂えるオルランド』のデータを比較の対象として使用する。上記の三作品はいずれもルネサンス期のイタリア文学において重要な位置を占める英雄詩である。特に年代順にみて最後に位置するタッソの作品を考察するにあたっては、先行する二つの騎士物語の参照が欠かせない。もちろん取り上げる作品が多ければそれだけ直接話法に関する情報の精度は高まるが、上記の作品だけでも研究に必要なデータは十分に得られるものと考えられる。後ほど確認するように、8行詩節内部のシンタックス構成には詩型に即した特徴があり、上記の三作品の直接話法も程度の差はあれこの構文の傾向にしたがって配置されている。本論文のデータもこれを裏付ける結果となっている。また三つの英雄詩の直接話法の総数は2000近くに達する。これら一つ一つの情報を集計することによって、一定の精度をもって科学的・実証的に8行詩節内の直接話法の配置の傾向を明らかにすることが期待できる。本論が提示する直接話法に関する数字は、見落としや数え間違いなど若干の遺漏を孕んでいる可能性があるが、全体としては三作品に共通する台詞の様態と、『エルサレム解放』におけるその特徴を明らかにするという目的を十分に果たしているはずである。このような数値化した情報に基づいて論を進める点が、本論文の方法面での特色と言える。

本論の第1章では、『エルサレム解放』と他の二作品の直接話法の全般的な傾向を確認しつつ、タッソの英雄詩に見られる台詞の配置の特徴を明らかにする。具体的には、三作品の直接話法の総数、分量、テキスト内に占める比率を提示し、次いで台詞の長さ（出現頻度が高い長さ）と連内の配置の傾向を指摘し、最後に導入表現の位置を踏まえて直接話法を四つの形態に分類しそれぞれの出現頻度を確認する。この検証を通して、三作品に共通する直接話法の全般的な傾向と、タッソの英雄詩における特殊な形態を明らかにする。

第2章から第5章では『エルサレム解放』の直接話法において特徴的な冒頭部の形態を考察する。8行詩節内の直接話法の配置は、台詞を導く導入表現の位置に即して4タイプに分類（I、P、M、E）することができる。このうち三作品いずれにおいても比率が高いのが、詩行の冒頭に導入表現を置き、それにつづけて行の途中から台詞を展開する形（Iタイプ）である。この標準的なIタイプの台詞の比率が、『エルサレム解放』においてはボイアルドとアリオストの騎士物語に比べて低いかわりに、Pタイプの配置の割合が高くなっている。このPタイプは、導入表現が前行末尾までに示され、次行冒頭から台詞が始まる形態である。またMは導入表現が直接話法に挿入されたタイプ、Eは導入表現が後置もしくは省略された（明示的な導入表現が存在しない）ケースを指している。本論の第2章ではこのうち、タッソの『エルサレム解放』において出現頻度が相対的に高いPタイプの直接話法の形態と効果を考察する。

第3章と第4章では、導入表現が直接話法内に挿入されたMタイプの台詞を分析する。タッソの『エルサレム解放』のMタイプの直接話法には、二つの特徴が見うけら

れる。一つは台詞の冒頭の一語とともに導入表現を挿入する形、もう一つは行の途中からMタイプの直接話法を展開する文型である。第3章ではこの前者の事例を対象に、導入表現の挿入によって台詞の最初の一語を分離・強調する効果、並びに発話を分断することでゆっくりその冒頭部を展開する役割を考察する。また第4章では、行の途中から始まるMタイプの直接話法が、前段の地の文と文法的に連続した状態で展開していることを指摘し、地の文の流れのなかに唐突に生起する発話の効果を分析する。

第5章では、詩連の偶数行を起点とする台詞の冒頭部を取り上げる。8行詩節の直接話法は、通常、詩連の奇数行から始まる。タッソの『エルサレム解放』では、このパターンに反して偶数行から始まる台詞が一定数存在しており、それらはしばしばPタイプの導入表現にともなわれている。またI及びMタイプの導入表現に導かれる場合は、その導入表現の配置に通常とは異なる特徴が付随することが多い。これらの点をデータによって指摘しながら、導入表現のタイプごとに該当例を分析する。

第6章と第7章では、台詞の末尾の効果を考察する。8行詩節の直接話法は、通常、詩行の末尾で締めくくられる。三作品いずれにおいてもこの傾向が確認できるが、タッソの『エルサレム解放』では詩行の途中で終わる直接話法が相対的に多い。第6章ではこれらの事例を取り上げて、本来の終点である行末に至る前に発話が終わるという特徴に留意しながらその効果を分析する。また第7章では、連の7行目で閉じられる台詞を取り上げる。8行詩節の直接話法の多くは、偶数行の末尾、特に8行目の末尾で閉じられている。一方でタッソの作品では8行目ではなく7行目で終わるイレギュラーな台詞の割合が他の二作品に比べて顕著に高い。この7行目で終わる直接話法の役割を、後続のフレーズに注意しながら明らかにする。

最後の第8章では、1行に収まる短い直接話法の配置の特徴が議論の対象となる。この短い台詞は、連の形式の拘束を逃れて8行詩節内に自由に置かれる傾向にある。このために作品の特徴が現われやすい。この1行の直接話法が『エルサレム解放』の詩連の何行目に出現しやすいかを数字によって示しつつ、それぞれの位置における該当例の役割を考察する。また11音節詩行の内部における1行の台詞の配置が4パターンに分類できることを示しつつ、『エルサレム解放』において特によく使われている配置の形に即して短い直接話法の機能を分析する。

本論の考察から導き出される主要な結論は、『エルサレム解放』の直接話法がしばしばその特徴的な配置によって、登場人物の発話のリアルな再現を行っているということである。タッソは台詞の特異な形態を通して、その場面の話者の状態にふさわしい仕方その言葉を提示することに努めている。

(論文審査の結果の要旨)

ルネサンスから反宗教改革へと移行する16世紀後半のイタリアにおいて異彩を放った詩人トルクワート・タッソ (1544-1595) の名声は後世においてさらに高まり、その作品はヨーロッパ諸国で広く受容された。とくに彼の代表作である『エルサレム解放』(1581年出版) が西洋の文学・美術・音楽に与えた影響は計り知れない。十字軍の史実をふまえ、騎士道的理念を歌うこの英雄叙事詩において、アリストテレス『詩学』で示された規範を遵守しつつ、名誉や愛、信仰といったテーマを理想化して提示し、それらを洗練された文体と複雑な心理描写によって表現することによって、タッソは後代の叙事詩のモデルとなり、また他のジャンルにも大いなるインスピレーションを与えた。

このイタリア文学を代表する古典についてはすでに膨大な研究の蓄積があり、これまでさまざまなアプローチがなされてきた。本論文の独自性は、『エルサレム解放』における語りを構成する直接話法(登場人物の発話)と間接話法(いわゆる地の文)のうち、考察対象を前者の用法に絞った点にある。ダンテの『神曲』やアリオストの『狂えるオルランド』などの古典的作品を対象にそのテキスト内の直接話法を扱った研究はイタリアでも注目すべき成果を挙げており、本論文のテーマも当然ながらそのようなイタリア文学研究の動向をふまえて選択されたものである。と同時に、本論文はそれらの先行研究とは異なる問題意識から出発し、タッソの作品について新たな知見を提示することを目指している。具体的には、イタリア叙事詩の主要な詩型であるオッターヴァ・リーマ(押韻された8行詩節)の内部で直接話法がどのように配置されているか、という問いを出発点として、詩型と語りの手法を関連したものにとらえ、詩型の構造がどのように叙述をコントロールしているのか、形式的枠組みと台詞(登場人物の発話)のシンタックス構成は常に調和的な関係にあるのか、という問いへと発展させ、最終的に、定型詩の制約を課された詩人がどのような語りの技法によって豊かな文学的効果を生み出しているか、という本質的な問いに答えようとしている。

本論文の方法論についても特筆すべき点がある。上述の8行からなる詩節(スタンツァ)のどの位置に直接話法が配置されるのか、という問題を客観的にとらえるために、論者は数量的なアプローチを採用する。また、『エルサレム解放』における直接話法の配置の特徴を明らかにするために、タッソの作品に加えて、ボイアルドの『恋するオルランド』(1495年出版)とアリオストの『狂えるオルランド』(1532年出版)のデータを比較の対象として使用する。3作品はいずれもルネサンス期のイタリアにおける代表的な英雄詩であること、またタッソの作品を考察する際に先行する2つの騎士物語の参照が欠かせないことから、この選択は適切であるといえる。こうして論者は3作品における直接話法の総数、分量、テキスト内に占める比率を明らかにし、次いで台詞の長さや詩節内の配置の傾向を指摘し、さらに導入表現(「～は言う」「～は言った」など)の位置(前置、挿入、後置、省略または非明示)によって直接話法を4つの形態に分類し、その出現頻度を確認することにより、3作品に共通する直接話法の全般的な傾向と、タッソの作品における特殊な形態を明らかにしている。このように作品分析の前

提となるきわめて詳細かつ緻密なデータが数値化されて提示されている点が本論文の大きな特徴である。

直接話法の導入表現に着目することにより、本論文におけるテキスト分析はきわめて精緻かつ繊細なものになっている。地の文と登場人物の発話との関係にはさまざまなヴァリエーションがあるが、中断された直接話法が話者の逡巡や動揺を表現している例や、直接話法の末尾の一語とその直後の語が母音融合によって緊密に結ばれることにより、人物の行為と発話の同時性が強調されている例を分析する論者の手腕は鮮やかである。このように描写と発話を組み合わせて登場人物の姿を読者の眼前にありありと提示する手法はタッソ自身が『詩作論』の中で主張した「明晰さ（迫真性）」の概念と結びつけて説明されるものであり、結果として「本当らしい」場面の「再現（ミメシス）」（いずれもアリストテレスの用語）となっていると論者は結論している。

脚韻を構成する2行詩連を構文上のベースとし、原則として偶数の詩連の組み合わせからなる8行詩節を用いた叙述スタイルはアリオストにより完成の域に高められたものである。タッソはこれを継承すると同時に、あえて調和的なシンタックス構成をずらして破格の効果を生みだしている、という論者の指摘も重要である。11音節詩行の半ばで終わる台詞がしばしば人物の焦りや不安を表現する一方で、偶数行の末尾で終わる台詞、つまり詩型の構造に沿って展開される直接話法は例えば指揮官の立場から軍勢に指示や勧告を与えるゴッフレードの権威ある説論や演説に相応しい構成と重みをもたらしていることなどが丹念な読解によって示されている。これらの分析をふまえて、タッソが8行詩節という詩型に新たな表現の可能性を付与したとする本論文の結論は十分に首肯できるものである。

以上のような詳細かつ精緻な議論にくわえて、明快な論旨、先行研究への適切な目配り、的確な引用とその正確な翻訳も高く評価すべき点であり、全体として完成度の高い論文である。惜しまれるのは、『エルサレム解放』に現れる直接話法を形式的に分類した上でその効果を分析するというアプローチを採用したことにより、テキストの解釈が断片的なものになってしまい、作品全体の構造やテーマと関連した分析が十分になされていない点である。論者が翻訳を手がけたタッソの創作理論（『詩作論』）と本論文で扱われた韻文定型詩による語りの技法との双方を視野に入れた総合的な作品論が企てられることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和6年12月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第3項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。